
代理伯爵私と意地悪従者の恋物語

ルナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

代理伯爵私と意地悪従者の恋物語

【Zコード】

Z3693S

【作者名】

ルナ

【あらすじ】

私が何故伯爵の代理などしなくてはならないんだ！！

フィアは公爵家の娘だが、伯爵位を継ぐ

はずだった双子の弟の逃走により

弟の代理として伯爵位を継がなくては

いけなくなつた。腹黒メイド、意地悪な従者、

しだいに騒がしくなつていく彼女の周囲。

彼女は最後まで耐えられるのか！？

プロローグ ～私が代理伯爵になつた訳～

私の名前はフィア・ラステイ・エドアルド。
エドアルド公爵の子供だ。

私は、今ふかふかとした椅子に腰かけながら、
苛立つたように眉をしかめていた。

この椅子は、伯爵位を継ぐものそのためだけに
作られた、特別なものだ。

何故それに私が座つていいかって？

それは、私が伯爵位を継ぐものだからだ。

否、性格には代理だが。

何故代理かつて？ それは、私の性別に関係している。

私の、本名にも。私は今、金の髪を後ろで一つに結え、
伯爵にふさわしい上等な上下に身を包んでいるけれど、女だ。

本名はフィリシアナ、フィアは愛称というか、あだ名だ。

この国ニルニアーダは、基本男でなくては爵位を継ぐことはできない。

どんなに優秀だろうと、力が強かろうと、駄目なのだ。
本来ならば、ここにいるのは私の弟のはずだった。

私の双子の弟、フィアルデア・ラステイ・エドアルド。
愛称は私と同じフィア。もちろん一卵生だが、私たちは
一卵性のようになつていた。

そのため、私は逃げ出した弟の代理としてここにいる。
父上が使用人やメイドに探させてはいるのだが、
要領のいい弟はまだ見つかっていないようだ。

そう、弟は勉強が大嫌いで乗馬やその他の運動も
あまり出来ないくせに、何故か要領だけはよかつた。
私は知識欲が高く勉強も大好きで運動も得意
(言つておくが私はナルシストではない) だつたけど、
要領が悪く不器用で弟とは正反対だ。

明るくて人懐こい性質の弟とは違い、人づきあいが苦手でしゃべるのも苦手、暗くはないけど明るくもない。

「これで披露の式に出るなんて冗談じゃない。

あ、披露の式といつのは、爵位を継いだものが王家の者や貴族を招いて開くパーティーのことだ。

なんと、あの馬鹿弟は披露の式に出ると言つておきながら、招待状を送り終えてもうキャンセルできない前口に、よりもよつて逃げ出してくれたのである。

しかも、腹心のメイドを一人連れて。

弟は昔から私にコンプレックスを持つていたらしい。

父上とおじいさまに話を聞くと、昔から

弟に私と比べる様な、弟のコンプレックスを刺激するような話をかなりしていたらしい。

「少しは姉上を見習つてもう少し公爵家の

者らしくしろ！！」

幾度となく、そんなことを言つていたのだといふ。

私は愕然としたが、一人を怒鳴つたところでどうなるものでもなかつた。

昨日、ずっとため込んでいたものを弟は吐き出したらしい。

「そんなに姉上がいいなら、姉上が爵位を継げばいいんだ！！」

弟はそう喚くと部屋に閉じこもり、しばらくして父上が訪ねて行くと、部屋はもぬけの殻、窓が開いて逃げた後があった、ということだ。唯一の救いは、弟が女装をしていたことから、公式には「私」が失踪したことになつてていることくらいか。

いや、よくない。私的には全然よくないが。

しかし、私の経験や未来はどうなるのだと今ここにいらないものに怒鳴つても何にもならない。

私的にはよくないが、「公爵家」的には伯爵を継ぐものが逃げたという前代未聞の大事件がバレなくて

安心なのだろう。私のいないところでそんな話を

していると、腰元のリル力に聞きたした。
この娘は私の乳姉妹でとても仲がいい。
つまりは私の乳母の娘である。

「フィア様……」

私が悩んでいる間に、空は暗くなり始めていた。
きらめく星がきれいだと現実逃避をしたくなる。

腰元のリル力が気遣わしげに声をかけてきた。

私は震える手ですつかり冷めたミントティーをする。
味なんて分かつたものではない。

それでも、心を落ち着かせるために私は

それを飲むしかないのだ。

「リル力……まだ、あの馬鹿は、フィアルデアは、
見つからないのか？」

「もうフィア様が出になるしかないかと……」

「冗談じゃない！！ 私に、あんな男どもの
相手をしろと！？」

自分で裏返った声が出たのだと分かつた。

私は別段深層の令嬢と言う訳ではないが、

そういう教育を施された事もあり、

男が苦手なのだ。誰にだって、苦手なことくらいはある。

しかも、男としてそういう奴らの相手をしなくては
ならないなんてひどすぎる。

あいつらは話に聞く限りでは、辛辣で横柄で寸足らずな
やつららしい。弟がそう言つていた。

すべてが、そういう訳ではないとも言つていたが、
そんなの救いにもなりはしない。

私はリル力の人形みたいにかわいらしい顔を

涙目で睨みつけていた。ふわふわとしたクリーム色の
髪といい、ほんのり赤く染まつた頬といい、

ほんとうにかわいい。だけど、中身は真つ黒黒だ。

「ファイア様、お心をお決めになつた方がいいのでは？」

何笑つてゐるんだよ、この腹黒メイド。

そんなに私の悲しむ顔がおもしろいか！？

何口元に手を当てておしとやかにごまかそうと

してゐるんだよ、私しか見ていないから。

ちょっとは優しいところもあると思った私が

間違ひだつた。いや、これでも私たちは仲がいいのだ。

彼女も仲良くしてくれているのだ。

多分……。多分、ね。

プロローグ ～私が代理伯爵になつた訳～（後書き）

すみません、他の作品のストーリーが浮かばなくなつてきたので、気分転換に新しい話を投稿してしまいました。ですが、絶対に簡潔させるので、これも見てください。

第一幕「私つてこの人達の主だよねー!？」

私はフイア・ラステイ・エドアルド。

今現在、伯爵代理を務めている。

何故代理かというと、私が女だからだ。

私は朝起きると、逃げ出した弟と瓜二つの顔を鏡で睨みつけながらベッドに腰かけていた。

腹黒メイドのリルカが馬鹿にしたように笑っていた。本当にかわいいのに小憎らしい。

なんで乳母はこんな子を産んだのか。

というか、なんで心優しい乳母に育てられた子がこんなに腹黒くなつたのか。永遠の謎だ。

「フイア様、何を考えているかただもれですよ」付き合いが長い彼女には私の表情だけで考え方を読めるようだ。しだいに笑みが黒くなつてきたので、私は慌ててベッドから離れて着替えを始めたことにした。

何かまだ目が怖いので自分で上等そつな(ていうか上等なんだけど)上下に着替える。

あれ、何で私メイドに怯えてんだろう。

私主だよね？ 幼馴染とはいえ、この子の主だよね？

あ、ヤバイ。こっち睨んでる。

何で心読めるの、本当に。

いや、私が分かりやすいのかもしれないけど。

「フイア様、新しくあなたに使える従者をお見えになつてているそうですよ。もたもたしてないで早くお着換えになつてくださいな」

じゃあ手伝つてよ。そう思つた私のことなど

お見通しの彼女は、にっこりとそれはそれは

かわいらしい悪魔の笑みを浮かべた——。

ようやく恐ろしいメイドから離れることができた。
かわいいのに目が笑っていないのだから本当に怖い。
何されるか分からない。一度怒らせた時、部屋を私が
怖いものが嫌いなのを知っているくせにオカルト
一色の部屋にされたことがある。

本もすべて怖そうなものばかりになっていた。
土下座して謝つたら許してもらえたけれど、
(蔵書も傷一つなく返ってきた)あの時の
恐怖はまだ忘れられない。

私の部屋、無事だよね?

私の冒険小説、無事だよね?

従者のあいさつよりも先に

安否を確認しに行きたい。

一度とオカルトティストな部屋なんて見たくもない。

私は一旦部屋に戻ろうとしたが、向こう側から見たこともない
顔の人とぶつかってしまった。

よろけた私は、その男に抱きとめられる。

言い忘れていたが、私は十四という年の割にもかなり小さい。
なので、簡単に男は私を受け止めてしまえたようだ。

「すみません、大丈夫ですか！？」

相手の男の人があいさつてきたので、

私は顔を赤らめて頭を下げる。

「ここに若い男など、あまりいない。

ひょっとしたら、新しく入った従者だろ？

「あの、あなたもしかして……」

「『あいさつがまだでしたね。俺は、新しく
ここで働くことになりました。

アルカ＝レアンと申します』

私は彼を上から下まで眺めまわした。

私は並より小さい方だが、彼の方も背は高いのだろう。
元劇団の売れっ子だったという年配の、背が高い
メイドよりもかなり高いようだった。

見目は、良く分からぬがいいのだろうか。

黒い髪に灰色の瞳をしている。

優しそうな人だなと私は思った。

と、私はまだ彼に抱かれていることに
気づいて身をよじった。

彼が慌てて降ろしてくれることを
望んだのだけれど、彼は私を降ろして
はくれそうにない。

気が付いていないのだろうか。

「あの、降ろしてください。わた……

僕はもう大丈夫なので」

危ない危ない。つい私つて言つところだった。
あたしつて自分を呼んでいる訳ではないから、
多分大丈夫だろうと気づいたのはこの後だった。

「あなた、女ですか？」

私の顔から血の気が引いた。

胸はさらしをまいてペったんこにしているし
(元々そこまで大きくはないけど)、弟は
女顔だったから女だと思われても仕方がない。

私は、実は女なんだし。

でも、バレたら困るのだ。

私は必死でごまかそうとした。

「な、何言つてるんだ、僕は、男だ！！

心外だな女顔とはいえ女だと

勘違いされるなんて！！」

睨むように灰色の瞳を見つめる。

従者の男、アルカと名乗った彼は
さらに私を高く持ち上げて目線が
あつよみにしたのであやうく私は
悲鳴を上げるところだった。

「何で、私に仕える人つて私の
言つことを全然聞いてくれないのかな？
私、この人達の主なのに……。」

「本当に、あなたは男じゃないと言い張るんですね」
「だからそりゃなんだつてば！！！ 僕は男なんだよ！！！」
「何でこんなに食い下がつてくるのかな、そこまで
私の演技は下手なの！？ ひょつとして何か違和感でも！？」
私の背中からだらだらと汗が流れて行くのが
自分で分かつた。後で、リルカは手伝つてくれないだろ？ から
自分で着替えよう、と思つた矢先だった。
「私の運命の相手が、男では困るな」

「はい？ 運命の相手？ それって私の事ですか？
私の脳内がクエスチョンマークでいっぱいになつた。
「サファイアの瞳、きらめく金の髪、占い通りの相手だ。
元々信頼などしていなかつたが……。
本当にいたとはな」

「あの～、あなた口調崩れてますよ。
さつき敬語だつたじゃないですか、何で乱暴な言葉になつて
なつてゐるんですか、いきなり。
私はなんだか怖くて本音を言つことができなかつた。
ぞわぞわと背中が粟立つ。怖い……。
目の前の男はようやく私を降ろしてくれた。
助かつたと思つたんだけど……。
「男だと言い張るなら、今ここで服を脱いで証明して見せろ
「なつ／＼！？」
私の顔が火を噴きそうなほど赤くなつた。

実際に顔は見えないけど、多分そのくらい赤いと思つ。動くことのできない私にアルカが近づいてきた。

「脱げないのなら、私が手伝いましょうか？」

「……っ／＼ 分かった、話すからー！」

近づいてくるなああああああああー！」

絶叫した私は何でこうなつたのだろうと思ひながら

彼に説明するのだったーー。

私は全ての事情を彼に話すと、「絶対に他言するな」と命じた。腹黒メイドのリルカが後にその様子を見ていたことを話して何故か憤慨していたが、その時の私はそれどころじやなくてまったく気がつかなかつたのだった。

「命令なんてできる立場だとお思いですか？」

私が一言誰かに話せば、お家はとんでもないことになりますな

私は一瞬、彼を鈍器のようなもので殴りたくなつた。

幸い、近くにそのようなものはないので、私は

不祥事を起こさずには済んだようだ。

「聞けないのなら首元にーー」

「くびにしたら全ての事情をばらします」

これからどうなるのだろう。初日から従者に正体を見破られた私は、お先真つ暗だ。

「フィア様、どうしたのですか！？」

リルカの悲鳴のような声を聞きながら、

私はそのまま気を失つたーー。

第一幕「私つてこの人達の主だよねー?」（後書き）

代理とはいえ、めでたくなんとか
伯爵就任したフィア。しかし、
メイドも新しく来た従者も
言つことを聞いてくれません。
しかも、初日で正体バレました。
フィアはどうなつてしまふのでしょうか、
次回もよろしくお願ひします。

第一幕 「腹黒メイドは本当に怖い」

私は腹黒メイドであるリルカに、廊下で正座させられていた。

文句を言いたかったけれど、あまりに彼女の目が怖かったので言つことができなかつた。

田覚めた瞬間、「正座してください、分かつてますね」そう言つた彼女の顔は夜叉にもまして怖く見えた。

だから私は従うしかなかつた。

一瞬だけ、私が主であることを

忘れていたほどだつた。

すぐに気付いたけど、睨まれたので口を

出すことはやめた。

あれ？ 何でだらう。田から汗が出る（泣）。

長々としたお説教がやつと終わり、解放された私はベッドに倒れ込んだ。

足が痛い。びりびりとしびれて痛む。文句を言つたらきっと腹黒い発言をさせるので私は黙つていた。

ちなみにお説教の内容は、昨日

新しく着た従者に正体がバレたことだった。

実はあまりに長すぎて右から左に

聞き流していたことはリルカには内緒だ。知られたらこんどこそ部屋の内装を

変えられてしまうだろう、本当に彼女は恐ろしい。

私は心中を見られる前に、きちんとした

伯爵の服装に着替えて外に出た。

私の（ていうか伯爵の）執務室にはすでに昨日の従者……あれ？

名前なんだつたか忘れたけど彼がいた。

「おはよう」

「アルカ＝レアンだ」

まず初めにあいさつ返せよと私は思つたけど言うことはできなかつた。

名前を忘れていたことを見抜かれていたようだ。

私は相當に分かりやすいのかもしねりない。

「俺のことを忘れていたとはな」

「ひやつ！？ な、何！？」

お、降ろせよ！－

ひょい、と私はまるで仔猫のように首根っこを掴まれてしまつた。

言うことを聞いてくれない腹黒メイドだつてそんなことはしなかつた。

慌てた私は羞恥と怒りで真つ赤になる。

その様子をアルカは楽しげに見つめていた。

嫌な奴だ。嫌な奴決定！－

リルカよりひどすぎる！！

リルカが聞いたら憤慨するかもしれないけど、今彼女はここにはいないからその心配はない。

私は横目で彼を睨みつけていた。

と、ここで私がさらに慌てるような行動

を彼が取つた。その腕に私を抱えたのである－－

前にも言つたかもしれないけど、私は深層の令嬢の教育を受けてきた。

まあ、実際にそんな令嬢にはまったくなつてないけど。なので、男性と触れあつたことも

ないしましてや抱きあげられるなんてもつてのほかだ。

顔が熱くなるのを感じて私は彼をさらに鋭い目で睨みつけた。

「な、何すんだよ降ろせよ！..」

「随分軽いな」

「い、一応女だからな！..」

顔が近く、今にも口と口が近づきそうな距離に私は慌てていた。

相手がちつとも顔色を変えないので、

理不尽とは思いながらも腹が立つ。

彼は女性と触れあつたことがあるのだろうか。

「女、ねえ」

スッと彼の指が動いた。

な、なんと、私の胸をなぞつたのである。

「大したことないな」

「ど、どこ触つてんだこのセクハラ野郎があああああっ！..」

私は彼を蹴りあげると彼の腕から脱出した。

彼が顔色を変えたけどそんなことかまっていられなかつた。胸を（さらし巻いてあるとはいえ）触られるなんて！..

私はこの男に殺意を抱いた。

凶器を持つていなくて本当によかつた。

持つていたら今すぐにでも犯行に及んでいただらう。

「とても女には見えない言動だな」

「い、今は男装してるからな！..

それに、あんた相手に淑女ぶつてもしょうがないだろ！..

「ははは、違いないな」

笑われた。さらに私の殺氣が高まつていいくのが自分でもわかる。本当にどこかに凶器ないかな？ 多分よけられるとは思うけど投げつけるか叩きつけてやりたい。

……羽根ペンつて凶器になるかな？

そんな私が犯行に及ぶのを阻止するかのタイミングで、
につこりと一見天使の笑顔を浮かべたりルカがやつてきた。

「お茶とお菓子をお持ちしました。

休憩になさつてはどうですか？」

私はちょっとホッとしていた。

リルカはノックをしなかつたのだが、
いつもことなので気にも留めない。

彼には、リルカは非常に愛くるしい
少女に見えているのだろう。

でも、私には分かる。

リルカは怒っていた。

彼女は幼いころから何故か
私に執着しているのだ。

誰かと私が仲良くしてしたり、
誰かが私をいじることを嫌い、
そのたびに邪魔をする。

自分はいじくり倒す癖に。

ひょっとしたらずつと部屋の外で
聞き耳を立てていたのかもしれない。
恐ろしい娘だ。

「どうもリルカさん、でも、そんなことは
私がやりましたのに」

「いいえ、フィア様のお世話は私のお仕事ですから
外面がいい同士二人は気が合わないようだ。
同族嫌悪とかいうやつだろう。

バチバチと火花のようなものが
二人の間にいきかつっていた。
あ、やばい仕事しないと。

私は一人を無視して仕事に戻ることにした。
正直お菓子には魅かれるけど仕事を

ためて後で困るのはごめんだ。

カリカリという羽根ペンの音だけが響く。

リルカとアルカはとりあえず黙つてくれたみたいだ。

無言で睨みあつてゐるけれど、声は発していない。

腹黒メイドは本当に怖い、意地悪従者もだけど。

私はそんなことを想いながら黙つて

仕事に没頭するのだつたーー。

第一幕 「腹黒メイドは本当に怖い」（後書き）

腹黒メイドと意地悪従者が火花を散らします。

お互い邪魔だと思っていますから。

さらに困ったことに陥るフイア。

彼女の運命は！？

次回は腹黒メイドが本性を
あらわにします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3693s/>

代理伯爵私と意地悪従者の恋物語

2011年8月6日13時39分発行